



大切な思い出

人には其々、その人なりの強迫観念や価値基準等の束縛がある。

法律とは異なる基準で設定されるそれら所謂自分ルールは、誓いや決意などとして人の迷いを断ち、勇猛な振る舞いを可能とすることもあれば、自己矛盾に陥った個人的な観念に囚われ自縄自縛（じじょうじばく）なり、一端に輪っかを作ったそのもう一端をドアノブに括り付けてドアの上部から垂らし、あとは首を引っ掛けて身長を伸ばすくらいのことしかできなくなったりもする。

恋文（こいぶみ）に『私が得意なことは、力無く地面に倒れ伏して項垂（うなだ）れていることだけです（意訳）』などと書いたのは、何という哲学者だったろうか？

『自分と交際しても何も得られないし、ただ損を（或いは不幸に）するだけです。結婚してください（超訳）』などと自己の欠点のみを表明したそれには、加えて『貴女の太くて逞しい首が素敵です』などと綴られており、デリカシーの欠片も在りはしない。

強いて擁護するならば、そんなスパムメールに打算の入る余地など毛頭無く、筆者はきつと誠実で卑屈な男だったのだろう。前文とは何の関係も無いが。

強いて言えば“できない”というワードからなんとなく連想されて、なんとなく閃いて、なんとなく気になっただけだ。閃きに前後関係など無い。

前後があつたとすれば、それは推察だったり洞察だったり考察だったのだ。

私はそう考える。

私とは何か。

私とは私であり、誰かであり、私達であり、神である。

何故なら、私が私と世界をそう定義したからである。

あなたは何者だ？

あなたは自分の真実が何であるかの解を用意しているか？

あなたは、あなたとあなた以外の境界線を何処に引く？

デカルトはこう答えた。

『衣服は私ではないが衣服なくしては生きられない。食物は私ではないが食物なくしてはこの身は実在し得ない。腕を切り落としても私は私であるので、切り落としても私でなく

ならない腕や肉体は私ではないのかもしれない。しかし、死んでしまえば最早私ではない。他者は私ではないが、他者なくしてこの私は人格は存在し得ない。空や大地も同様だ。私が私であるために不可欠なこれらは、果たして私ではないのだろうか？

不可分に思えるこれらを削ぎ落して在り続けるものが無いのなら、本当に私などというものは存在していると謂えるのだろうか？

そして “不可分に思えるそれらを削ぎ落とし尽くして残るものは何か？” と思考していて私は気が付いた。

私は何者であるかを思考しているとき、確かに思考しているナニカが存在している。

そしてそのナニカは、それそのものだけで在ることができると。

故に、私はその俯瞰する思考者を私であると定義する（意識）』

所謂『我思う、故に我在り』である。

私からしてみれば、そのナニカさえ、シナプスと脳内物質の織り成すピタゴラスイッチでしかないのだが、それもまあ一つの解ではあるだろう。所詮は、何を何と定義するか

という問題だ。

再び問おう。あなたは自らを何であると定義する？

なに、大した話ではない。

この物語は死後を扱う性質上 “死ぬ” とは何か。

“生きている” とは、どういうことを謂うのか。

そして死ぬということは、死ぬ存在を定義していなければ始まらない。故の問いだ。

だから考えておいてほしい。想像してみしてほしい。

一体、何が死んでいて何が生きているのか。

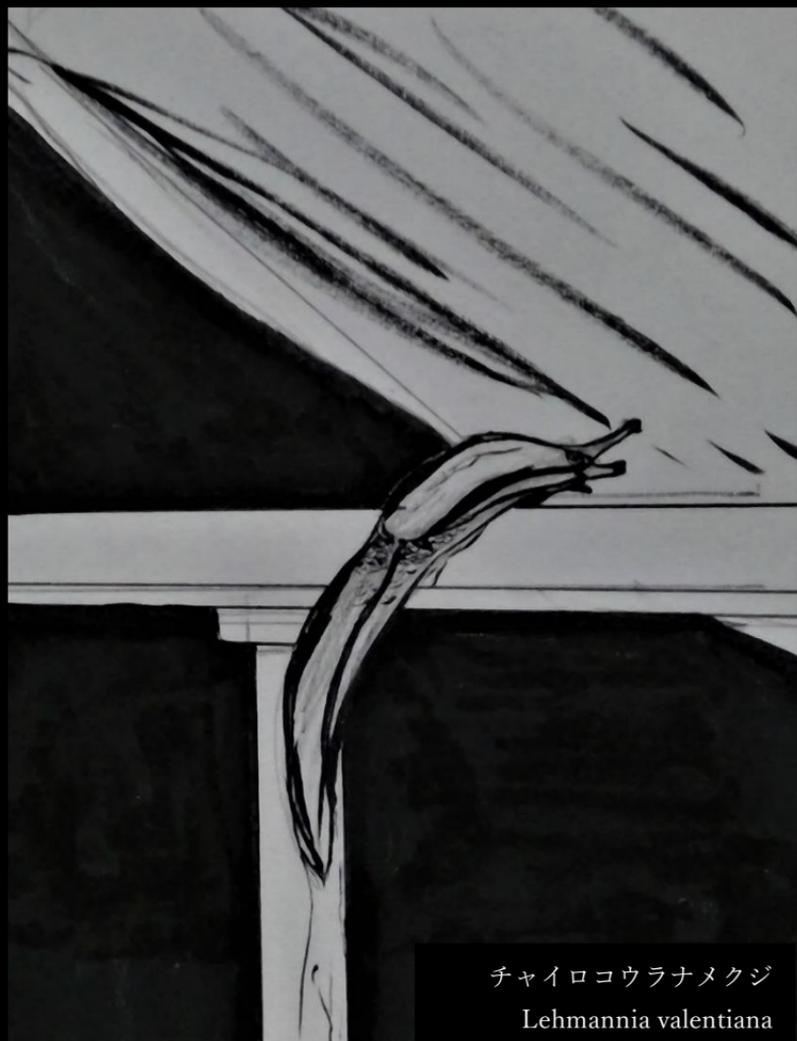
あれは生きているのか、それとも死んでいるのか。

死後、意識が永久に消失するとはどういうものか。

御前は本当に生きているのか？

一冊読み終える頃には、一つや二つ解が見つかっているといいですね。などという期待

は天に放り投げ、前書きも仕舞ってしまつて「むかし、むかし」と噺を始めます。



6月のいつか。

それは期待と不安に右往左往と彷徨い続け、五月病を抜けられた人にも、抜けられなかった人にも等しく曇天辟易と訪れる湿気た季節です。私は嫌いじゃないが、ナメクジは得意ではないですね。ナメクジも、得意でなく苦手なだけで嫌いではないけれど。

「誕生日ねえ…」

「欲しいもの、してほしいこと。」

「私たちにできる範囲のことなら、してあげるから言ってみて」

ところで私はボランティア部のようなものに所属しており、現在その部長様と部員様方から、なんやかんや理由を付けて私の誕生日会をしたいという密談に偶然遭遇してしまい『バレたとあっちゃあ、仕方あるめい！』と捕らえられ尋問を受けているところである。

「そんなもの欲しそうに見つめても、健全男子的な熱い期待には応えられないわよ…？」

「そういうのは求めてないし、美人が台無しだから口を閉じろ、セクハラ部長」

「まーた、照れちゃってー」

照れとらんわ。

「でも風さん。氏紙さんの誕生日会は大賛成だけど、それなら歓迎会が先じゃないです

か？ 順序的に」

私こと氏紙楓うじしかほの車椅子係である加賀城雀かがじょうすずめが、私の頭上から、我らの部長様へ進言する。確かに。

「そうとも限らないわよ、雀。

歓迎会は後からでもできるけど、誕生会は誕生月しかできないわ」

「なるほどメブ一理ある…」

「まあ、それはいいとして、私にとって私の誕生日は祝うものでないからなあ」

「はいはい、ネガティブ禁止ー」

「なんてこった。 まあいいけど」

私は彼女たちの期待通りに喜んで見せることができないので、一言挟んで置かずにはいられなかった。 まあ、どうでも良いことだけれど。

「勇者部30人くらいでしたっけ？ 今月誕生日の人、私以外にも居るんじゃないです

か？ そっち優先してくださいな」

「勿論そっちも含めて盛大に祝うつもりだけど、やっぱり最初は特別っていうか、氏紙君が今回の主役であるべきじゃない？」

「…ちなみに私以外の面子はどなたで？」

「6月はたしか、夏凜さんと若葉さんだね」

ふーん…

「あの二人が好きそうなことといえば、何かな加賀城さん」

♪ 訓練と勝負事かなあ？」

勝負師夏凜と葵天狗の若葉！ …どっちも煽り耐性無いし弱そう。

「まあ…：誕生日はともかくとして祭囃子は好きですからね。二人を全力で祝ってくれりゃ必然私も楽しめるんで、そういう方向で進めて下さい」

私が意味のあるように意味の無いことを言うと、犬吠埼さん（部長）が「くっ…」と声に出しながら腰を折り、悔しそうな表情を浮かべる。煙に巻かれて追及できないのに進展無しなものな。どんまい。

…まあ、実際難しいのだ。骨を折った怪我の功名でいつも傍には加賀城が居て、両脚粉砕骨折させた成果により、ちょっと話しかけただけで幸せそうに笑ってくれるほど加賀城が懐いてくれていて、とても可愛らしい。

人懐こい年下の従妹に『構って構って』とせがまれてはいるような、そんな優越感があり、周りを見ても部員たちは心配になるほどの善人しか居らず、仲間の危機を身を挺して庇われた負い目があるとしても、出会ったばかりと言って差し支えない私を祝福したいと言う。

愛おしい彼女たちにそのようなことを言われては、枯れて久しい私の涙腺にも水気が戻ってしまいそうだ。

私は私の誕生を呪っているが、それはそれとして私は既にこの環境に満足している。

だから助け舟を渡そうと思うことにする。

「あ、そうだ犬吠埼さん。

この通り私は怪我人ですんで、性の付くものが食べたいですね。お願いできますか？」
少しわざとらしく提案して見せれば、即時彼女は意を酌んでくれる。

「おうよっ！ 任せんしゃい！ 骨折なんて瞬く間に治っちゃうような、とびつきり性の付く美味しいご馳走で貴君を持って成してしんぜよう！」

帆船はんせんに風、渡りに船。

追風おいてに帆上げて順風満帆。

風はとかく隙間に入り込み、澱みを祓う。

風は花粉と種を運ぶ恵みであり、大事を推し進める偉大な力である。

しかし同時に、黄風は人の気を狂わす「通り悪魔」という邪気である。

良しも悪しも、様々なものを運ぶ風の二面性を理解した上で、正気で以て付き合ってい

きたものだ。

そのように彼女を力の源と捉えようと、やはり提供すべきは「船」となるだろう。

水を得た魚同様、そうしてこそ彼女の実力は存分に発揮されるのだ。

何故魔王ロールを混ぜたのかは分からない。

きっと特に意味は無い。

「氏紙君、苦手なものとか食べられないものとかある？」

「そうですね。噛み砕けないものと、消化できないものと、毒物くらいですかね」

「あ、無いのね分かった」

「ちなみに腐敗物は毒物に含まれます」

「それじゃ、次は夏凜と若葉へのプレゼントはどうするかってところねー」

「勇者部のツッコミ離れが深刻である……」

「いや、あんなミエミエの釣り針に掛かったりしないって氏紙さん」

「魚は釣れなかったが……まあトラバサミに掛かった雀で我慢しとくか…」

「なにそれ酷いっていうか、トラバサミって「星屑にバツクンと」黒い…！ ジョークが黒い…！！ 確かにバツクンされたけど、それ庇って怪我したの氏紙さんだし胸が痛い！」

『まあ気にすんなよ。まだ両脚潰れただけじゃねえか』というのが本心だが、深刻にされそうなので口にはしない。

「フッフッフ…チュン助や… この場合、トラバサミとは星屑だけを指しているのではなく、チュン助と氏紙さんが囚われたあの一週間を示すと共に、トラバサミの力でチュン助のハートをガツチリ離さずしかし自らを犠牲にしてもチュン助には絶対に怪我をさせないぞという愛と覚悟の表明でありつまり『一生御前は俺というトラバサミに囚われの小雀だ。結婚しよう…雀…』って意味なんよ！！ビュオオオオウ！！！！」

「きゃあ♡大胆っ」

「ば、馬鹿なっ！ ただ軽口を言っただけのはずが、気が付くとプロポーズにされていた…！ これがカブ中（カッブリング中毒者）の妄想力だということのかっ!?」

「え……………えと… そのお…」

隣に座った加賀城がもじもじと頬を染め、ウエットな上目遣いでこちらを伺っている。

とても可愛い。紳士の心臓を鷲掴みにする媚び方まで覚えてしまつて最早無敵だな。

少女が人知れず女に成長していく姿は感慨深く、感動的で、しかし二度と無垢だった頃には戻れない不可逆な喪失感に似た切なさとしさを伴つて年寄りの胸を締め付けるのである。私の中に生じたこの感情は、愛娘が初めての彼氏を連れてきた日の父親の気持ちとどちらが近いだろう？

「私が君たちに手を出すことはないよ」

「それはつまり、氏紙さん総受けの方向で宜しくと」

「そうか乃木よ、仕置きがお望みか。それならそうと素直に言えばよかろう……頭骨の割れ目に指を添えて力いっぱい握りしめてやるからこっち来い」

私をネタに妄想するのは構わないが、それで加賀城なんか本気な感じになってしまうのは良くない。私に全くその気が無い分罪深くある。

「痛いのはやだ〜♪」

「イヤマフと目隠しに猿轡さるくつわ着けて簀巻きにして、眠れないように額に水を滴下（てきか）し続ける拷問とかの方が良いかな？」

「いや〜ん、氏紙さんに束縛されて眠れない夜が続いちやう〜♪」

「(実在する拷問法なのに) 無敵かこのやろう…」

「…園子ならどんな状況でも眠れてしまえそう」

「難攻不落…っ!」とは言ったものの…さすがにそれはどうだろう…

寝れちゃうんだろうか… 今度自分で試してみるか…

「ちよつとあんた達へ、遊んでないで会議に参加しなさい」

「「はーい」」

「雀も、いつまでそうしてるの! シャッキリしなさい!」

「びっ!? ごめんなさいゆるしてわたくしのような駄チュンチュンが調子に乗ってごめんな

さいだから怒らないでメブーっ!!」

「別に怒ってはないわよ。もう…」

加賀城雀は、今日も小雀ほどの心臓でおっかなびっくり遅く生きているのである。

「そういえば、若葉さんの誕生日会議だというのに、上里さんはいらっしやらないんです

のね?」

「ひなたには、若葉が部室に近付けないように暗躍してもらってるわ」

「なるほど適任ですわね。では夏凜さんは」

「樹と小学生組と、ついでに球子を派遣してあるわ」

「じゃあ私は？」

「…雀に頼んだんだけど、雀が接触するより早く部室に到着するとは思わなかったわ…」

「うっうっ…申し訳、ごぜえませんです部長さまあ…」

「何故かバリアフリーが完璧すぎて車椅子だろうが全く移動に不自由しないからな、この学校」

「ああそれは東郷のときに改装した名残ね」

そうなのか。

「ねえ、ぐんちゃん♪ 若葉ちゃんのお誕生日会はどんなのが良いかなー？」

定位置となっている郡の膝の上で、隙あらば高嶋さんがイチャついている。

最早人目など憚^{はばか}らぬバカッフル全開か？ 末永く爆ぜろ。 みっちり密着し続けて互い

の体臭が染み着き、混ざり合い、部屋や身体から本来していたはずの個人の匂いがしなくなるくらいべったりイチャついでいやがれ。それを見て私はとても潤う。

「乃木さんのことなら、上里さんが既に考えているんじゃないかしら…」

「確かに足止めが必要だからって、ひなたさんが何の用意も無く、若葉さんの誕生日会会議の場を離れるとは思えませんかね」

「それが『今年は勇者部でのお祝いとは別に、個人的にお祝いするのもアリかなと♪』です。私と若葉ちゃんのことはお気になさらず、氏紙さんメインでお祝いしてさしあげて下さいね♪』って言われてるのよねー。むしろ、ネタ出しの頼みの綱だったのに…っ！」

「なんとまあ、道を譲り合ったがために通せんぼが発生していると言いますか…」

「杏！ 西暦組知将の杏は何か思い付かない!? 何でもいいから…！ むしろ何でもするからあっ！」

「ええっ!? わ、わたし、そんな大層なものじゃ…！」

犬吠埼さんは何時見てもオーバーなりアクションで、感情表現が豊かだなーと感じる。

今のも、3年間連絡も取らず放置していた一人息子を突然呼び付けておいて何の説明も無く『乗れ』の一言で凡庸ヒト型決戦兵器に搭乘させて死地に送り込もうとした某アニメの某結社の某グラサンお馴染みの某ポーズで頭を悩ませていたかと思えば、不用意に近付

いた伊予島さんの両の二の腕辺りを水蛭（ヤゴ）もビックリの超スピードでがっしりホルドしてめっちゃ揺すってる。可愛いね。

船を渡しても錨（いかり）上げなきゃ進まねえってか碇指令だけに。

ハハッ…驚愕のくだらなさ。

「じゃあもう、千人組手とかで良いんじゃないですか？」

「それは1年目にやった」

まじか。

「じゃあもう…私が独善で決めるので、一晚預からさせていただいて良いですか？」

「えっ……それは助かるけど…」

「決定したらもう変更できませんけど、なあに悪いようにはしませんて」

悪いようにはしないが、私の良いように扱う。

「…自分で聞いといてあれだけど、すっごい不安…」

「落ち着いて、フーミン先輩。氏紙さんは今『自分が独断で決めるけど、それで構わないかな？ 決定後の異議は認めないけど』って言ったんよ。」

了承したら最後、氏紙さんの好きなようにあんなこと・そんなこと命令されても逆らえ

なくなっちゃうよ？

疑ってるわけじゃないけど、何をするつもりなのか聞いてからの方が良いと思うな」
静まり返る教室。

悪魔の罠に気付き、肝を冷やしたのか顔を青くするもの。

信じていたのに危うく騙されかけたと、少しぎこちなく悲しそうに微笑むもの。

突き刺さる視線は、信じられないものを見たとき雄弁に訴えていて、各々（おのおの）実に可愛いらしい表情を見せてくれている……などということは無く、そろそろ誇張表現がくどいし話を進めよう。

「クッククック……もう少して勇者部の全権を掌握できたのだがな…… やはり勇者相手に一

筋縄ではいかんか」

「氏紙さんが勇者部部長の座を狙っていただなんて……！」

「友奈ちゃん的全権を掌握しようだなんて、よくもそんな大それた真似を！」

「あーもうグデグデだよー……」

「安定の勇者部クオリティ……」

「あっ！そうだ！ 車椅子でずっと同じ姿勢だと凝っちゃうって聞くし『みんなで色んな

リラクゼーション法調べて、マッサージをプレゼント』ってのほどうかな！」

「それ良いね、赤嶺ちゃん！」

「え」

「ゆゆゆ友奈さん達のマッサージをプレゼントですよ?!」

おお：なるほどその発想は無かった。

「おお落ち着いて、そんな性急に答えを出しちゃダメよあんた達、ホラ氏紙君は男の子だし？ 普段からそういうの気にして私達から少し距離を取ってるみたいだしねえ氏紙君!？」

「ふむん：数十年生きていたけど、マッサージすることはあっても、される経験って特に記憶に無いし、三好さんも乃木さんも運動好きだからマッサージはちょうど良いんじゃないかな？（私がアンタから距離を置いているのは、主にアンタの免疫が低過ぎるからだ犬吠埼さん）」

「ノオウツ！」

「ああっ：ダメよいけないわ友奈ちゃん！友奈ちゃんの温かく優しい手でそんな密な触れ合いをしたら氏紙さんが友奈ちゃんに良からぬ感情を抱いてしまうわ……！」

「そう言うても、他に妙案も無いしなあ。アカナの案が没になると消去法でうっちー案
なって、それこそユツキーをものされてまうかもしれんで、トゴ？」「くっ…」
しないゆーとるやろがい。

「んあんもうっ、どうなっても知らないわよ氏紙君！」

「ただのマツサージで大袈裟な」

「やー、私も止めた方が良いと思うなー…」

「でもでも、合法的に氏紙さんにお触りし放題だよ？」

「いや、アブラの浮いた貧相な私の「よし採用！」なんでや、加賀城さん…」

「加賀城が欲望に素直すぎる…」

*

誕生日会当日。

結局他に案も無かったので、マツサージ案が採用された。

「～」「お誕生日おめでとう！」「～」

クラッカーの破裂音と共に、祝いの言葉を贈られる。

私にとって私の誕生日は全くめでたいことではなく、すべての過ちと苦しみの始まりであり諸悪の根源である。

私は生まれたくなどなかったし、生まれるべきではなかった。

私は自殺するために生きてきた。

故に、能動的に私が誕生日を伝えることはないし、仮に祝われたとしても嬉しいと感じることもできず、嬉しくもないことに形式的に喜んで見せる義務が生ずるだけで億劫なところの上ない。

彼女たちを傷付け苦悶させるだけなので、決して口にはしないが――

「? どうしたの氏紙さん。変な顔してるよ?」

「いや：誕生日会なんて初めてのことだし、こういうもんなのかなあと」

室内はうどんや骨付き鳥の出汁っぽい匂いと、巨大なケーキの上で焼けて気化した蠟

(ロウ)の匂いと、何故かアロマキャンドルと抹香の臭いが漂っており、ふかふかの布団が部屋の一角を占拠している。

「じゃあ私たちが氏紙さんの初めての相手だね!」

「せやな」

加賀城がグイグイ来るけど深くはツッコまないし、特定の何処かからビュオオオウと風が吹いて、飲んでいたジュースが気管に入ったのか伊予島さんが酷く咽（むせ）て涙ぐんでいるけど眼福だなあとしか思わないよ。メシが美味い。

…味で個人を特定する技能など私には無いが、この肉は弥勒さんが焼いたものなのだろう。ドヤ顔が美しいです。骨を砕いてからというものの、弥勒飯には世話に成りっぱなしなので『この味は…！』などと察した風に名前でも呼んで感想を伝えるべきところなのだろうが、ここは敢えて黙し、モクモク黙々と弥勒飯にガブリ付くことで答えようと思う。

「気持ちの良い食べっぷりね、楓」

…向こうからやって来られては対応するしかあるまい。

頬張った肉を飲み下し答える。

「どれもこれも、中学生が作ったとは思えない出来ですからね」

「弥勒が手掛けたのだから当然よ」

「その通りで御座いますね」

「フツ、もっと褒めてもいいのよ？」

「そっすね」

ううん、もう少し焦らしても良いけれど、待ってるみたいだし勿体ぶることも無いか。

「いつもありがとう御座います、弥勒さん。 奇天烈なところはあれど、あらゆる意味で安定している弥勒さんの存在にはいつも癒されています」

「…フツ、気にしなくて良いわ」

「誰が作ったかまでは分かりませんが、これを作った人は、もういつでも嫁に行けますね」

「♪ 今日は随分と不器用なのね？」

「何の話ですかね？」

「いいわ。 また後で」

そう言っつて弥勒さんは、乃木さんのところへ歩いて行っつた。

凜としていて、自分に自信を持っていて、拘るけれど引き際は潔く、自信家であっても傲慢ではなく、言葉や振る舞いに冷たさや刺々しさは感じられない。

本当に中学生なのか疑問を覚えるほどの良い女だ。その気高さの源泉は何処にあったのだろうかと夢想すると『何かの反動なのではないか』と一抹の不安を覚えることもある。

私には健全な家庭で育った人間の精神性を想像できない。

だからこれが杞憂であればよいし、もし悪い想像が当たって溜め込んでいるものを吐き出す必要に迫られたときは……まあ私などが出張るまでもないだろうが、もし孤立してしまふようなことがあれば『心中までなら付き合つてやろう』と考えるし、その最悪を想定して日頃から精神安定の助けになれるよう意識して予防を心掛けている。

まあ弥勒さんに限った話ではないが、異形の神のバケモノと対峙している彼女たちの精神に何らかの歪みが生じたとしても、それはそうあるべくして生まれた必然だろう。

これは私の認知が歪んでいるだけだろうが、彼女たちの共依存と取れるほどの過密な友好関係は、薄壁一枚隔てた向こうに居る恐ろしいものに気付いてしまわぬようにと、互いの存在で視界を埋めて目を逸らし『自分は戦える』と奮い立たせているようにも見える。

それはまるで、明日の予定や今日あったことに想いを馳せ、穏やかに眠りに就くはずが、夜の静寂に響く家鳴りや時計の針の音に目が冴えて、僅かに開いた襖の奥の暗闇に姿の見えない魔物を想像してしまったり、妙に頭に残るコンピニヤCMの音楽が唐突に脳内

再生されて振り解けなくなる様に、今ある自意識は死後どうなってしまうのか、肉体を失っても意識だけが残り、見ることも動くこともできないのだとしたら、それは閉じ込め症候群と何が違うのか。

自意識が消滅してしまうとはどういう状態なのか等、答えの出ない想像に憑りつかれて思考を止められず、夜闇に自らが想像した魔物を恐れて助けを呼ぶことも、眠りの世界に逃げることも叶わず、独り、朝日が昇るまで布団に潜って膝を抱えていた誰かのような。

「はあっ!? 友奈達のマッサージュフルコースがプレゼントですってえ!？」

おっと。そういえば誕生日会の真っ最中だった。

三好さんが結城さん達に手を引かれてベッドに押し倒されている。

「いらっしやいませー♪」

「わ、わたしは普段からトレーニング後のケアもしっかりやってるし、凝ってるところも無いから…! 大丈夫だからあ?!?!?!」

なにか様子がおかしい。

三好さんは特別他人に触れられるのが苦手ということは無かったと思うが。

「あっ……んっ……だめ……」

「シャツチョサーン、ココですよネー？」グリッ

「ああっ……！ 人前りえっ……んっ……！ ゆうなあ……っ♡」

……私は何も見なかった。

ただの指圧マッサージのはずなのに、結城さん達が身体に指を押し込むたびに三好さんの腰が浮いて、耐え難い快樂から逃れようと脚を懸命に動かすも馬乗りになった結城さんから逃れること叶わず、両サイドから赤嶺さんと高嶋さんが捉えている二本の腕が力無く脱力していく様など私は見ていない……

単純に設置者がその色が好きだという理由で置かれただけなのだろうピンク色の間接照明が如何わしいマッサージ店らしさに拍車をかけているとか、漏れる甘い吐息に、トロリと紅潮した三好さんの瞳に溜められた涙を幻視していたりなどしているわけがない。

強大な敵（快樂）にも勇敢に立ち向かい、そして散っていった君のことはきっと忘れな
いよ多分……

乃木さんは、古波蔵さんの整体と弥勒さんのアロママッサージ？に上里さんの耳かきを受けるようだ。立て看板？に書いてある。なんて言うんだっけ、あの洋食店や喫茶店の入り口に設置されてる黒板みたいなやつ。ブラックボード？

そして私の意思とは無関係に車椅子が動き出す……加賀城だ……加賀城が私をあゝの異様な空気に包まれたマッサージエリアに連行しようとしている……っ！ 両足砕けていて逃げられない私に一体なにをするつもりなのか……っ！ 如何されてしまうのか……っ！ っと、そう大した距離も無いので、独り脳内ボケで遊んでいるうちに整体中の乃木さんのくぐもつた声のするお布団の隣に到着。

「さっきぶりね？楓」

「氏紙さんのマッサージは、雀と私たちが担当します」

私を待ち構えていたのは弥勒さんと桐生さんと楠さん。

加賀城を入れて四人掛かりか。

「なんか無難」

「氏紙さんは怪我人ですから。うっかり怪我を悪化させてしまうかもしれない人選は避けるべきですし、だからと言って力の弱い子達では男性の氏紙さんには物足りないだろう

ということ、こうなりました」

不摂生を重ねた元の身体なら兎も角、中三のこの身体はそもそも凝っていないし、私は貧弱者なので筋力には必要ないと思いますよ、楠さん。

「友奈さん達が多分一番上手だけど、さすがにあれを氏紙さんに受けさせるのはどうかと思っしねー」

「それは聞き捨てならないわね、雀。楓の身体を構成する何%かは弥勒飯で出来ている。即ち、最も楓の身体を識（し）っているのは外ならぬこの弥勒であり、弥勒こそが

最も楓に安楽と悦楽を与えることができるのは自明の理」

「おっ、そやな。」

んじゃまあ、とりあえず立ち話もなんやさかい、横ん成りや、社長ーサンっ」

「社長だったこともあるけど、それは決まり文句なんですな」

「マジか！ スツズ、玉の輿やん！」

「なななななに言ってるの静さん?! なに言ってるの?!」

「あら、良かったじゃない雀。社長夫人になれば安泰よ?」

「も、もうメブまでそんなこと言っ……!」

私みたいな何の取り柄もない駄チユンチユンは社長様の3歩後ろから付いて回ってお零れを頂けたらそれで充分なの！ 社長夫人なんかになったら、きつと氏紙さんを狙う女の子たちに剃刀入りの封筒送られたり、一生懸命作った愛妻弁当を掠め取られて床にぶちまけられたり、親切にしてくれた先輩が下剤盛られて以来、虐めに巻き込まれるのを恐れた同僚たちにスケープゴートされたり、ロッカーに閉じ込められて寒さに震えながら朝が来るのを待つことになったりするから私は愛人くらいでいいの！」

あー……そこ……いいわあ……

後頭部の直ぐ下……うつ伏せに寝てPC作業したりするから、首筋は結構溜まるのよね。 ……やべえ、弥勒さんの頭皮マッサージ完璧じゃん……さすが弥勒さん……

「愛人にはなりたいたいですね……」

すやすやと眠る乃木さんの頭を撫でながら、上里さんが会話に参加する。 乃木さんと伊予島さんでなくともやはり女子中学生。 まことに姦しい。

……そういうえば嬌声（きょうせい）か聞こえなくなっただけど、三好さん大丈夫かな……？
まあいいか。

「落ち着き給えよ、諸君『社長だったこと』だ。つまり過去形よ」

「でも社長やったんやろ？」

「社長になるだけなら20〜30万で起業できるし、大した話ではないのよ。

正しく維持し続けられるかどうかが重要で、単なる肩書きに囚われてはいけない。

肩書きで言えば、ホームレスだったこともあるからね」

「私は気にしないよ氏紙さん♪ それって裏を返せば、どんな苦境でも生き残ってきたってことだもんね♪」

まあ、最終的に足を取られて事故死するんだけどね？

てか一回庇っただけで懐き過ぎじゃない加賀城さん？ 相手は選んだ方が良いぞ？

「……素面（シラフ）で恥ずかしいこと言うんじゃないやありませんっ」

「えっなに？ どういうこと？」

「そういえばこのマッサージって、最近何処かで見たとような気がするんですけど」

「これは桐生さんの提案で、傷病者のリハビリテーション施設等で行われる医療マッサージを参考になっています」

「まあ言うてウチら無資格者やさかい、怪我人にやったらアカン操作とか予習した程度のモンで、ロックに至ってはマッサージ班ちゃうから完全に自前やけどな」

なるほど。

「マッサージ班じゃないのにやっってはるんすか、弥勒さん」

「フツ、礼には及ばないわ」

「この前も思ってたけど、ほんと世話好きやねえ弥勒さん。好きよ」

「……ツフ」

「おお、唐突過ぎてロックが言葉に詰まりよった」

「桐生さんも、態々調べて下さったんですね。ありがとう御座います」

「エエて、エエて、うちーには漫才の相手として世話んなっとるし」

「シズさんのそういうところ、ホント愛してる」

「アハハハ！おおきにな！ 何のこっちゃ分からんけども！」

いえーい。

「明け透けに愛を口にする氏紙さんの周りは、いつも特有の風が吹いておりますなあ…」

「メモメモ♪ 来年のバレンタインデーが待ち遠しいです〜」

*

祭りは終わり。

キッチンから談笑や鼻歌交じりに、泡立つスポンジがシユコシユコと頻り（しきり）に収縮と膨張を繰り返し、蛇口から流れ落ちる水の音や、カチャカチャと洗い終わった食器を重ねる音が聞こえてくる。

犬吠埼さんには「氏紙君は祝われる側なんだから寝てて良いのよ？」と言われたが、準備や片付けも祭りの醍醐味なのだから極力参加したい。……私は参加しなかった。

片付けの号令のあと食器を下げようと身体を起こしたところで、自身の脚が醜く抉れ、潰れ、砕けていることを思い出した。

一応、骨は着くだろうとは言われているが、骨の再生と機能の回復は別の問題であり、殆ど千切れかけていたこの脚で再び立つて歩けるようになるかは分からない。

私の脚2本ぼっちで加賀城を死なせずに済んだのだから後悔は無いが、行動の制限によって、得られたかもしれないものが得られなくなったと実感すると、やはり惜しむ感情は湧いてくる。偶々加賀城が戦えるようになったから良かったものの、武器を持たない加賀城単独で敵を屠ることは難しく、殺されていた可能性の方が高かった。

もし加賀城を失っていたらと思うと、我が身を惜しむ感情に微かな罪悪感を覚える。

おかしな話だと思う。

私は今『加賀城が死んで自分が死に損なった場合』を想像している。

加賀城が死んでいたら自分も死んでいたはずで、そんなことは到底起こり得ないはずなのに、加賀城が先に死んでいたら自分は死なせて貰えなかっただろうと考えている。

…まあ、そんなことはどうでもいい。

車椅子でウロチョロしても邪魔になるだけだ。

何の力にもなれない居心地の悪さを隠すために、自身の体温が宿る布団に倒れ伏す。

私はどうしてこんなところに居るのだろうか…… 無駄なことばかり考えていかんか。

生理か？ 意識を内から外に向けろ。

隣からスースーと静かな寝息と、眠るものとは別にもう一人、衣擦れのする位置関係から存在を把握できる。三好さんが寝かされている辺りからは何も聞こえてこない。

瞼を透過して届く光がチラチラと揺れ動く。誰かが照明を遮るように動き、陰になっていくのだ。明かりの下（もと）、食卓周辺からはガサゴソとゴミを詰める音と、台拭きに

よってテーブルの脚がキシキシと軋む音がする。

子供たちの足音と笑い声。壁を隔てた先から水の音。

意識を凝らせば目を閉じたままでも、誰が何処に居るのか7〜8割ほどは把握できる。

誰かが忍び足で近付いてくる。

加賀城が起こしに来たか、小学生が寝顔でも見に来たか。

姿を隠し足音を殺しても、身体の重みで床が鳴り、衣は擦れ合い息遣いは零れ、光を横

切れば影法師が踊り、身体が環境音の遮蔽物となれば音色が変わる。とかく生物の複合

的な痕跡（気配）を完全に断つことは難しい。

例えば観測には3通りの方法がある。

・一つは光や音の反射・屈折によって実体を把握する方法。

・二つ目は対象そのものが光や熱を放っている場合で、触診もこれに含まれる。

・三つ目は例えるならば、対象を含めた空間を水などで満たし、水が存在しない虚空間

に存在（空気）を認知する。見えず触れもしないものを捉える逆説的手法で、暗黒物質

や暗黒エネルギーなどの理論上でしか語られていない存在Xの多くがこれにあたる。

件の誰かが私の枕元に着き、しゃがんで覗き込んでいるようだ。

目が合うと気まずいので私は狸寝入りを続ける。

暫くの沈黙の後「…嬉しくないかもしれないけど、私達は氏紙くんが産まれて来てくれたことを嬉しく思ってるから。お誕生日おめでとう、楓くん」と、その誰かは祝福の言葉を一言述べて黙り込む。

……態々言いに来なくとも良い。

祝福を捧げたところで、私がそれを受け取ることは無いと君は知っているのだから。

存在を確かめるべく瞳を開いても、やはりそこには何者の姿も在りはしなかった。

*

誕生日会という祭りの後始末が終わり、其々が其々の帰るべきところへ散っていく。

加賀城が私を「送っていく」と言ってくれたが、今日は既に日が暮れているため丁寧に
お断りした。不審者など早々現れないが、女子中学生を一人夜道に放り出すわけにはい

かない。

夜道の危険をあのか賀城が分からないはずはないのに、何故か加賀城を含めた数人が

「ああ」と残念そうに母音を伸ばし、加賀城を宥め（なだめ）ていた。

とんでもないわ。

ということで、寮生でない犬吠埼姉妹と三好夏凜・東郷美森・結城友奈・乃木園子の6名と共に帰路に行く。結城さんが「慣れてるから任せて！」と言うので、彼女に車椅子の操縦をお願いしている。

「ニコニコして、どうしたの友奈ちゃん？」

「えへへ、なんだかこうしてると東郷さんが二人居るみたいだなーって」

「たしかに三つ編みとか違いはありますが、氏紙さんも長い黒髪なので、後ろ姿だと似ているかもしれませんね」

「車椅子の東郷かー、なんだか懐かしいわねー」

数年前まで、東郷さんの両脚は全く動かない状態で、今わたしの車椅子を押している様に、東郷さんの隣が自宅である結城さんが車椅子を押して登下校していたのだという。

もしかすると、こんなにも早く私のような異物が彼女たちに受け入れられているのは、

無意識に刷り込まれた友人の姿を重ねているせいもあるのかもしれない。

……そもそものが疑うことが苦手で、限りなく献身的な勇者たちに自己犠牲的行動を示し、骨を折って異性であるという脅威を喪失させ、さらに車椅子で擬態する。…なるほど腑に落ちる。彼女たちなら私を誤認しても不思議は無い。

「あっ！ 氏紙さんにプレゼント渡すの忘れてた！

はい、氏紙さん！ ハッピーバースデー♪」

「誕生日会までやって、プレゼント渡すの忘れるかね普通…」

「ふふっ、そのうちったらまた寝ていたの？」

「…ああ……………どうも」

好意のある相手達から、何であれ想いを向けられるむず痒さと、救いようなない自存在への苦々しさが同時に込み上げ喉が詰まる。会の最中は役に扮していたので応答に特に苦労はしなかったが、素では上手く言葉を繕えない。

「違うんよ、わっしー。 王様ゲームでフーミン先輩とにぼっしーがチューすることにな

つて、ナツつんとイツつんが」

「いや王様ゲームなんてやってないし、寝てたでしょそれ絶対」

「…あれ〜？」

切り替えろ。

「いや、赤嶺さんの案が採用されてなかったら王様ゲームにするつもりだったし、別の世界線ではやってたぜ？」

「なななんとっ！」

「世界線が変わるときに、みんな忘れてしまったのさ…」

「そっか…でも、あれは現実だったんだね、氏紙さん…」

「ここもまだ道中に過ぎない…」

君はもう忘れなさい。これ以上、仲間との記憶の食い違いに苦しむ必要なんて無い」

「でも…！ それじゃあ氏紙さんが…」

「案ずるな。私自らの手で君たちを殺めた世界線だつてある。今更孤独など」

「そんなの嘘だよ！

…氏紙さんはずっと苦しんでるよ？ 今だつて…分からなくなっちゃったの…？」

「おーい、友奈が信じかけてるから帰ってこーい」

「はーい♪」「あいさー」

「えっ えっ…?」

「つまり夢だけど」「夢じゃなかった!」

「わーい! ってコラア!」

「これだけ騒いでも夏凜さんが目を覚まさない…」

こうして、私の2度目の…何歳だっけ?

中三だからえーっと……………私の2度目の中三の誕生日は穏やかに更けていく――

「そのっちは何をブレゼントしたの?」

「フクロウナギのナイトキャップと、可愛いお洋服♪」

「ふくろうなぎ…フクロウ…ウナ…あっ! ウナギ犬みたいな…!」

「フクロウナギは風船状に膨らむ大きな喉袋と、体長の1/4近くある大口が特徴的なフクロウナギ科の深海魚ですよ。 これです」

「…わっ!? なにこれ妖怪?!」

「お魚です」

帰宅後、乃木さんのプレゼントを開けると、頭から肩まですっぽり覆われる最早帽子（キャップ）とは呼べないサイズのフクロウナギと、可愛い服が入っていた。

：一応袖を通してみるとそれは何故かピッタリサイズが合っていて、どこかから個人情報漏洩しているのではないかと脳裏をよぎった。そして

「何故、スカートなのだろうか… 中学生男子なんてまだ全然童顔だから可愛いけど… たしかに、ちょっとやってみたかったことではあるけれど…

似合ってしまうけど…」

後々の展開が読めてしまっただけか…

「ふむ。スカートの裾から覗くギブスはエッチだな …… ああ、そうか」

無骨で硬くて太い、制服のズボンを通らないギブス。

痛ましい傷を隠すように広がる、ゆったりとしたロングスカート。

女子中学生のグループに混ざっている異物を、奇異の目で見る人間たち。

「乃木さんなりに気を遣ってくれたわけか」



けれど『本当にこれで良かったのか』と悩んで、渡すタイミングが別れ際になってしまったと。樹海で潰した脚を笑い話にするのに協力してくれたり、私の悪戯に気付いて未然に防いだり、まあ、何とか貴重な人材だな。

